里　館　遺　跡

第 60 次発掘調査報告書

2016 年 12 月

太平工業株式会社

盛岡市教育委員会

里　館　遺　跡

第 60 次発掘調査報告書

2016 年 12 月

太平工業株式会社

盛岡市教育委員会

例　　言

1　本書は岩手県盛岡市北天昌寺町及び天昌寺町に所在する里館遺跡の第60次発掘調査報告書である。調査原因は太平工業株式会社社屋の新築であり、調査地の地番は盛岡市北天昌寺町17番の6、及び同町28番の20である。

2　平成28年5月12日付けで、太平工業株式会社代表取締役社長山下雄二より盛岡市教育委員会に発掘届が提出され、直ちに岩手県教育委員会へ書類を進達した。県教育委員会からは同年5月26日付けで当該工事着手前に埋蔵文化財確認のための試掘調査を実施するよう指示があった。これに基づいて同年6月6日に試掘調査を実施したところ、事業計画地内から中世城館の堀、土坑などの遺構が確認されたため、建築工事着手前に本発掘調査を実施することになった。協議の結果この発掘調査について事業主の太平工業株式会社から盛岡市に発掘調査を業務委託することとし、調査に係る経費は全て太平工業株式会社の負担により実施することになった。調査期間は平成28年7月4日から同年8月1日までである。調査の後、遺構図面等調査記録や出土遺物の整理を行い、平成28年12月30日に発掘調査報告書を刊行し、全ての業務を終了した。

3　調査の体制は以下の通りである。

○　事業主　　太平工業株式会社　代表取締役社長　山下雄二

○　受託者　　盛岡市　　盛岡市長　　谷藤裕明

○　調査主体

盛岡市教育委員会　教育長　千葉仁一　教育部長　豊岡勝敏　教育次長　中野玲子

歴史文化課　課長兼遺跡の学び館長　杉本　浩

・事務局　　・遺跡の学び館

課長補佐	吉田宏明	館長補佐	北田牧子	副主幹　菊地幸裕
文化財主査	三浦陽一	文化財主査	室野秀文	津嶋知弘
学芸主査	岡　聰		神原雄一郎	花井正香
文化財主査	権頭祐子	文化財主任	佐々木亮二	
文化財主査	今野公顕	主　事	佐藤美沙	
主　任	寺島幸子	文化財主事	鈴木俊輝	
主　事	菊地祥宏	文化財調査員	日野杉潤子	今松佑太　及川　栞里
文化財調査員	鳥取邦美	学芸調査員	樋下理沙	坂本志野
	千葉茉耶			
	戸沢博子			

○　発掘調査及び報告書作成

小松愛子　佐藤和子　佐藤美智子　谷藤貴子　千葉留里子　梅田英治　藤田友子

○　調査協力

宗教法人天昌寺　渡辺設計事務所　株式会社タックエンジニアリング

○　調査指導・助言

飯村　均（公益財団法人福島県文化振興事業団）　羽柴　直人（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）　八重樫　忠郎（平泉町役場）

4　調査に係る記録類、出土資料は盛岡市遺跡の学び館で保管している。

目　　次

例　言
目　次
Ⅰ　遺跡の位置と環境……1
Ⅱ　調査の成果……7
Ⅲ　総括……12
抄録

図 版 目 次

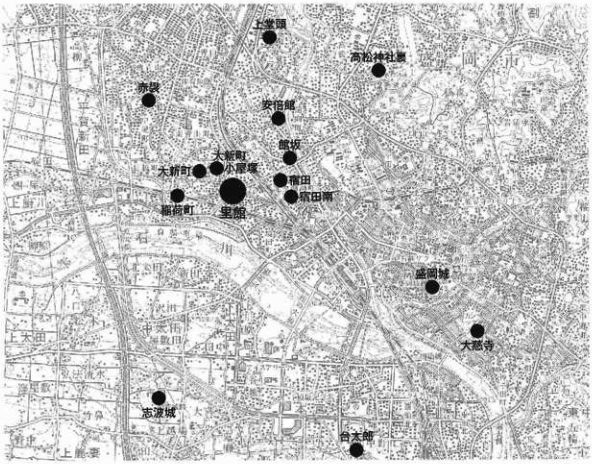
第1図版　調査区全景……15
第2図版　SD500 堀　……16
第3図版　SD515 堀　……17
第4図版　土層断面……18
第5図版　出土遺物……19

挿 図 目 次

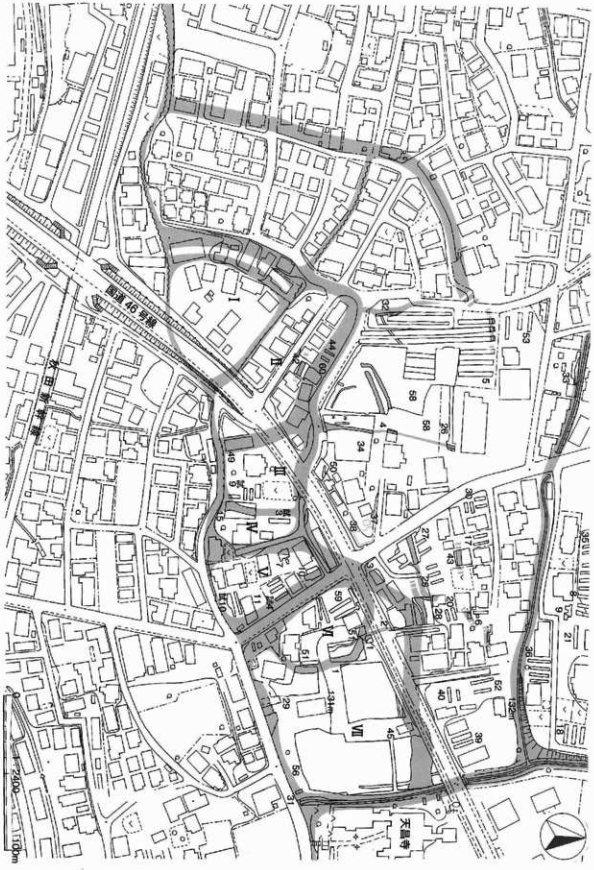
第1図　遺跡位置図……1
第2図　遺跡地形図……2
第3図　里館遺跡の地割（明治期）……3
第4図　調査区周辺図……6
第5図　SD500 堀、SD515 堀　……8
第6図　SD500 堀、D515 堀、SK516 土坑、SK517 土坑、柱穴……9
第7図　出土遺物……11

Ⅰ　遺跡の位置と環境

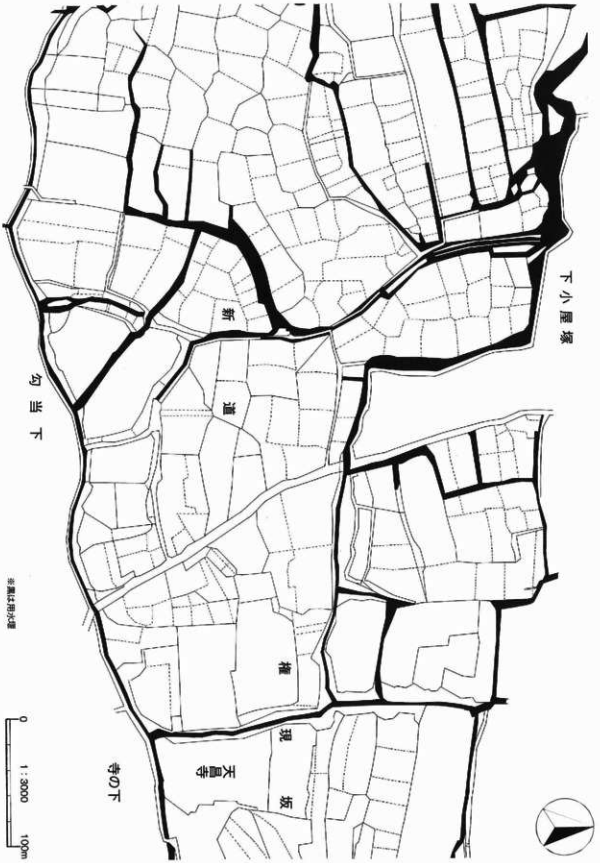
里館遺跡は盛岡市北天昌寺町及び天昌寺町に所在し、中世城館跡を主体とする遺跡である。ここは東北新幹線盛岡駅から北西に1.9㎞の地点であり、北上川の支流雫石川北岸の低位段丘南辺に立地している。遺跡の標高は130ｍ～132ｍ、南側段丘崖の比高は3ｍ～5ｍである。段丘崖から北へ0ｍほどで一段高い滝沢台地に登る。この台地は岩手山の火山灰砂台地で、現在の滝沢市柳沢から東南に張り出し、盛岡市の青山町から大新町、大館町、前九年に至る。この台地の縁辺部には大館町、大新町、小屋塚、前九年の縄文時代から古代にかけての集落遺跡が濃密に分布している。里館遺跡付近は江戸時代には岩手郡栗谷川村の里館、勾当館と呼ばれていた場所である。明治以後は岩手郡厨川村に属し、昭和15年(1940)に盛岡市に編入され、現在に至っている。里館遺跡は明治の頃には貞任の本丸と伝承（吉田東伍1906）され、平安時代後期の康平5年（1062）9月17日、安倍貞任、宗任等の安倍氏一族が滅んだ厨川柵擬定地（吉田東伍1906、菅野義之助1925）とされていた。また本遺跡の900ｍ北東にある安倍館遺跡は工藤氏の栗谷川（厨川）城跡であり、安倍氏の堰戸柵擬定地（伊能嘉矩1925、小笠原謙吉1941）とも云われている。昭和34年（1959）里館遺跡東方の字権現坂のうち、鉄道用地の発掘調査が実施され、柵跡、楼



第1図　遺跡位置図



第２図　遺跡地形図



第3図　里館遺跡の地割（明治期）

跡、溝などが確認された。その結果厨川柵、堰戸柵は里館から安倍館にいたる広範囲（板橋源 1958）と主張した。しかしこの調査成果を今日の考古学的知見から検証しても 11 世紀の柵の遺構遺物とする根拠は薄弱である。里館遺跡、安倍館遺跡は昭和 56 年（1981）以後盛岡市教育委員会による発掘調査が継続されている。その結果両遺跡共に中世の城館跡であることが明確になったが、11 世紀の安倍氏に係る遺構や遺物は確認されていない。11 世紀の遺構と遺物は、里館遺跡北方の大新町遺跡、小屋塚遺跡、赤袋遺跡、上堂頭遺跡などで確認されているが、柵の位置を特定するには至っていない。また 12 世紀では里館遺跡西側の稲荷町遺跡で居館跡が確認されているほか、近年里館遺跡西側でも溝、掘立柱建物、竪穴建物、柱列などの遺構群が確認され、かわらけ、常滑の捏ね鉢などが出土している（盛岡市教委 2014）。これらは平泉藤原氏の拠点が厨川にも存在したことの傍証である。文治 5 年（1189）平泉を制圧した源頼朝は厨川まで北上し、9 月 11 日から 8 日間滞在した。9 月 12 日、御家人の工藤小次郎行光は源頼朝より岩手郡を拝領し、盃酒塊飯を献じている（註 1）。以後厨川に拠点をおいた工藤氏は岩手殿と呼ばれ、郡地頭職を継承した。鎌倉時代中期の建長 8 年（1249）6 月 2 日、幕府が奥大道沿いの夜討強盗取締まりを沿線の郡地頭に命じており、その中に岩手左衛門太郎、岩手次郎の工藤氏一族と推定される名が見える（小笠原謙吉 1941）。鎌倉時代のある時期に、岩手郡地頭職は工藤氏から北条氏へと移行した（菅野文夫 1999）と考えられているが、建長 8 年頃までは工藤氏が地頭職を担っていたものだろうか。鎌倉幕府滅亡後の建武元年（1334）、岩手郡仁王郷（盛岡市中心市街地付近）の領有をめぐって南条清時と後藤基泰が争っている史料が静岡県大石寺に残されている（註 2）。鎌倉時代の南条氏と後藤氏は共に有力な得宗被官であるが、仁王郷の「本主」と主張する南条氏は鎌倉時代後期ごろに地頭代または郡奉行として入部していた可能性があり、当時は北条氏が岩手郡地頭職であったことになるだろう。鎌倉時代の遺物は里館遺跡からも散見されているが、当時の遺構はまだ明確ではない。里館遺跡では 14 世紀から 16 世紀にかけての遺構遺物があり、特に遺跡東半部では 15 世紀から 16 世紀の城館の存在が明らかである（盛岡市教委 2013）。一方安倍館遺跡も 15 世紀から 16 世紀の城館であることが明確になっており、16 世紀に規模を拡大していることが判明している（盛岡市教委 1999）。里館遺跡、安倍館遺跡ともに栗谷川工藤氏の城館であり、里館遺跡が先に存在し、戦国期に至って栗谷川城（安倍館遺跡）が築かれ、16 世紀に規模を拡大した（前掲）。この城は天正 20 年（1592）に破却された（註 3）とされているが、祐清私記（伊藤祐清 1749）には盛岡築城警護の城としてこの城を残していたことが記されている。同書によれば、盛岡築城後、栗谷川城の破却を工藤氏が拒んだため、南部利直は工藤氏と縁戚関係にあった大釜氏に命じて工藤氏を討伐したという。

南部氏の盛岡開府後、盛岡城下町北西側の栗谷川村には秋田街道と鹿角街道が通じていた。城下の西の出入口である新田町からは雫石川北岸を秋田街道が通じ、新田町東の片原からは鹿角街道が分岐して北西に延びていた。鹿角街道は江戸時代初期には夕顔瀬、館坂から栗谷川古城の外堀沿いに北上していたが、後に西漸して片原から棒（坊）村（宿田南遺跡付近）、宿田、孤森（前九年三丁目）を経て寺田方面（八幡平市）へと通じるようになった。寛文 8 年（1668）幕府巡見使に提出した奥州之内岩手郡栗谷川古城図には、里館遺跡のあたりに栗谷川村があり「古城ヨリ此所迄拾五町程、高千五百拾八石余、物成惣六分ヨリ、人数千貳百九拾人、家数百五拾五軒、馬数四百八拾貳疋、牛数貳疋」と記されている。明治期の公図では字権現坂に含まれている。寛文 8 年の図では栗谷川村の西に勾当館、大館が並んで記され、東側には畑中、その南には下堂が記される。勾当館は里館遺跡西部の呼称であり字新道に含まれる。この南側段丘下が字勾当下である。里館遺跡の東部から天昌寺を含む地域は字権現坂で、この南下

は字寺下である。権現坂のうち天昌寺西側の里館について、盛岡砂子（星川生甫 1833～1874）には「いつの頃何某の居館にや由来を不詳」と記され、江戸時代末期には館主伝承も不明となっていた。里館にはかつて里館稲荷社が存在し、寛永２年（1625）の神主工藤淡路守藤原盛光は工藤行光の末裔と云い伝えられていたと同書に記されている。これは里館遺跡が栗谷川工藤氏の城館であったことを間接的に裏付けているものといえよう。

里館遺跡の城郭構造については、市街化による堀の埋没などで不明な部分が多い。そこで明治期の地籍図に見られる地割りと、発掘調査で確認された堀や大溝を手がかりとして縄張を復元すると、第２図のようなプランが浮かび上がる。字新道と字権現坂の境は遺跡中央の南北方向の市道である。この両側の段丘縁辺部にⅠからⅦの曲輪が並列する。この全ての曲輪が同時期に機能したとは考えにくく、後述するように概ね西半の勾当館が古く、東半の里館が比較的新しい時期に営まれた可能性が高い。勾当館のⅠは現状では段丘崖下の字勾当下と同じくらいに低くなっているが、元は標高 131 mのⅡと同一面の曲輪であったものが、大正 14 年（1925）ころに国鉄橋場線（後のＪＲ田沢湖線と秋田新幹線）建設の土砂採取で削られた部分である。勾当館はこのⅠ、Ⅱ、Ⅲが標高 131 mで最も高く、東側のⅣからⅤにかけては次第に低くなり、勾当館と里館を分ける堀へと移行する。今回の調査区はⅡの曲輪の北東側中央部にあたる。堀の廻り方はⅠの西側は二重堀と推定され、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴはそれぞれ一重の堀で区画される。Ⅰの曲輪の堀はⅠとⅡの曲輪全体を囲む堀（SD500）の内堀になっているらしく、Ⅰの曲輪が勾当館の主郭であり、Ⅱは副郭、ⅢとⅣはⅠとⅡに準ずる曲輪と位置づけられよう。Ⅴの曲輪は字新道の内であるが、ⅣとⅤの曲輪を分ける堀が大きく、里館北辺の大形空堀に連続する可能性が高いので、縄張りの上では里館に含めるべき曲輪であろう。勾当館西側にはⅠとⅡの曲輪を要とする放射状の地割りが存在し、約 75 m外側には北から流れてくる用水堰が取り囲む。これが勾当館の外郭部分と推定され、用水堰は外郭の堀跡を踏襲しているらしい。ここから分岐した堰は南東側のⅠとⅡの間の堀を踏襲している。この用水堰と道、土地区画からみて外郭部分も２～３区画程度に分割されていた可能性があるが、発掘調査ではまだ明らかになっていない。里館はⅤ、Ⅵ、Ⅶの曲輪で構成されており、Ⅴが最も低くⅦの東側が最も高い。Ⅴの西側からⅥ、Ⅶの北側は大形の空堀で区画され、Ⅵの周囲はやや小ぶりな空堀で囲まれている。土地の高さや縄張りからⅥが里館の主郭であり、Ⅶが副郭、Ⅴは捨曲輪のような性格であろう。Ⅵの曲輪内部はまだ不明確であるが、試掘調査では多数の柱穴と土坑、竪穴建物跡が確認されている。Ⅶの郭内には大小の掘立柱建物や竪穴建物で構成される屋敷群がある。ここからは 13 世紀から 14 世紀の土器や陶器が少量出土しており、主に 15 世紀から 16 世紀の陶磁器が出土している。特に瀬戸・美濃大窯期の遺物が多い。東側天昌寺との間には堀跡を踏襲する用水堰が流れており、南の段丘崖から 150 m北の地点で東西方向の用水堰が直角に合流している。この地点が里館の外郭部の北東隅と推定され、この用水堰は北側と東側を画する堀であろう。これに囲まれたエリアでは大溝や溝が確認されている。遺跡東側の岩鶯山天昌寺は現在曹洞宗寺院であるが、寺伝によれば安倍氏の時代から厨川柵に所在した寺と伝えられている。安倍氏当時の寺院の詳細は明らかではないが、中世には栗谷川工藤氏の菩提寺であった。

第4図　調査区及び周辺図

Ⅱ　調査の成果

1．調査遺構

第60次調査区は里館遺跡の西部に位置し、南側段丘崖から約60m、勾当館のⅡの曲輪北東辺の中央にあたる。今回の調査区の南側については、駐車場造成時に第42次調査として部分的に試掘調査が実施され、人為堆積土の落ち込みが確認されていた。これは後述するSD515堀である。調査区北半部は戦後間もない頃までは低い水田となって堀のプランが残っていた場所でSD500堀に該当するが、調査前には北側市道と同一面まで盛り土されていた。調査区の基本層序は、地表から40cm～120cmの間は黒褐色の表土または新しい盛土層である。遺構検出面のレベルは標高130.6m～130.7mで、地山のシルト層上面である。この表面のシルト層はかなり砂っぽい褐色ないしは黄褐色のシルト層であまり締りがない。SD500堀の壁面で観察すると、標高129.7m以下には表面のシルト層よりも粘りのある灰黄褐色のシルト層があり、標高129.0mより下には粘性のある黒褐色土層が堆積している。この土層は縄文時代中期から後期の遺物を包含している場合があり、今回の調査でも頁岩製の剥片が出土している。さらに128.7m以下には硬く締った褐色のシルト層、128.0m以下は暗褐色ないし褐色の砂礫層となる。

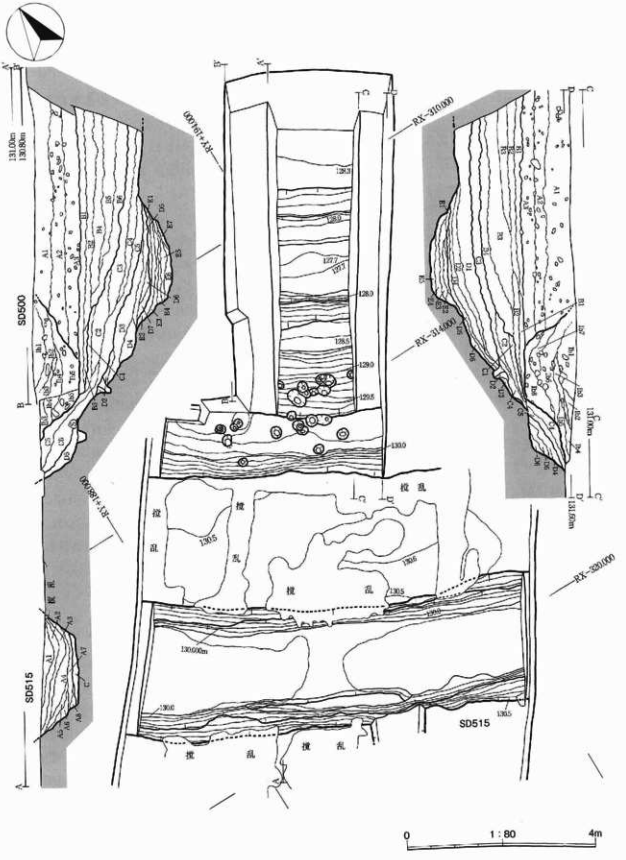
（1）堀

SD500堀（第5図～第7図）

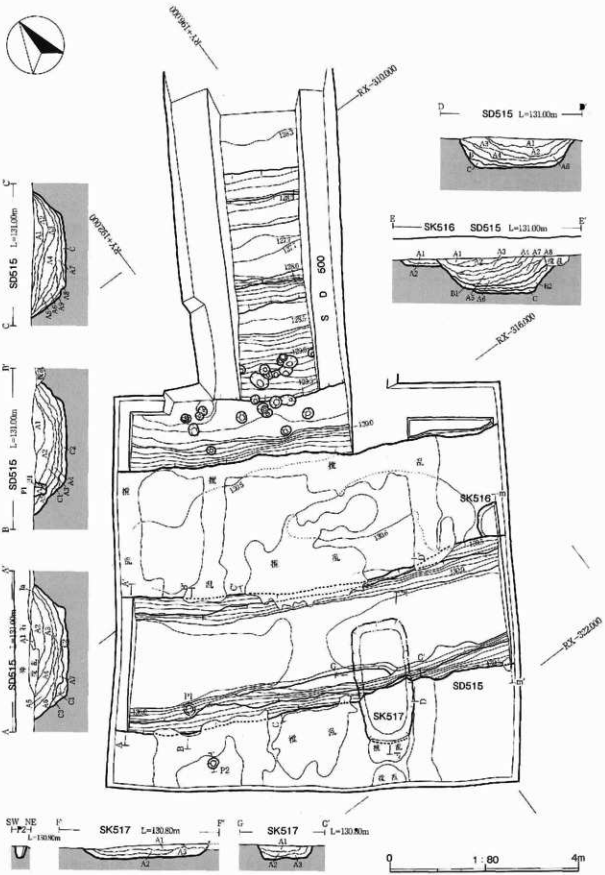
調査区北側表土直下の褐色シルト層上面に確認された空堀で、北側の市道に併走している。新旧2時期の変遷があり、旧期の堀は新期の堀に掘り込まれ、底部近くは残存するが、壁の中部から上部は失なわれている。また新期の堀の南壁は4.7mの長さを確認したが、北壁は調査区外の市道の下になっているため未確認である。

旧期の堀は幅2.84m、深さ0.72m、長さ1.9mを確認した。壁の傾斜は南壁が45°から56°、北壁が29°から35°で、南壁に比べて北壁が緩やかである。壁の上部は新期の堀に掘り込まれて失われ、本来の堀の規模は推定幅約7m、推定の深さ2.84mで、底部幅は1.0m～1.1m、堀の断面形は箱薬研堀である。底面は地山の砂礫層に到達している。埋土のE層はすべて自然堆積であり、ヘドロ状の黒褐色土に褐色または鈍い黄橙色のシルト粒が多く含まれ、酸化鉄分が沈殿している。各土層は水分を多く含んでおり、底部に湛水していた可能性がある。遺物は出土していない。

新期の堀は確認された幅7.2m、南壁は深さ2.1mである。底面は北側へ緩やかに傾斜しており、内部の堆積土は調査区北端部分が最深部となっていることから、堀の幅は14m以上と推定され、断面形は箱堀である。壁の傾斜は40°、壁の上部には幅80cmの犬走りがあり、この壁は56°前後である。壁の上部から犬走りにかけては、径16cmから40cm、深さ10cmから20cmの柱穴が不規則な配置で確認されている。壁面の柱穴は堀の内部に向けて外傾するものがあり、後述する堀埋土のD層を掘り込んでいる柱穴もある。堀内部の埋土A層は多くの礫と木片、コンクリート片を含む新しい人為堆積層で黒褐色土、青灰色土、褐灰色土、褐色土の混合土。南壁側を溝が掘り込まれており、溝内にはⅠb層の暗褐色土、褐灰色土の混合土が堆積している。B層からC層は自然堆積層で、B層は黒色ないし黒褐色土主体で暗褐色土や灰黄褐色土の粒が混入する。C層は黒褐色土主体で暗褐色土や鈍い黄橙色土の粒が混入する。D層は壁際から底部に堆積した土層で、黒褐色土に暗褐色土、褐色土、黄褐色土が多く混入する。D層は人為堆積の可能性もある。出土遺物は犬走りの壁際のD層から第7図1（下）、C2層から第7図1（上）の常滑



第5図　SD500堀、SD515堀



第6図 SD500、SD515堀、SK516、SK517土坑、柱穴

の甕体部破片、B層から第7図2の轆轤カワラケ破片、第5図版9の肥前染付皿と8の相馬大堀窯系海鼠釉茶碗の破片、第5図版3の手捏ねカワラケ小破片が出土している。

ＳＤ515堀（第5図～第7図）

ＳＤ500堀から2.8ｍ南の褐色シルト層上面に確認された堀である。SD500堀と概ね併行している。総延長は8ｍ確認し、東西の延長部分は調査区外である。堀の幅は2.3ｍ～2.8ｍ、底の幅は1.4ｍ～1.8ｍ深さは0.7ｍ～0.78ｍ。壁の傾斜は南北ともに50°から55°、断面形は逆台形の箱堀である。堀の北壁がSK516土坑を切り、南壁はSK517土坑に切られ、埋土A層をP1柱穴に掘り込まれている。堀の埋土はすべて人為的に埋め戻されており、堀の南側からの流入量が多い。A層は暗褐色土、黒褐色土、黒色土、褐色土の混合土で、ほとんどが粒状または塊状をなす。B層は黒褐色土と褐色土の混合土、C層は暗褐色土と褐色土の混合土である。出土遺物は堀の東端部B１層より第7図1（中）の常滑甕の体部破片、中央部A層から縄文土器の小破片、第7図3の手捏ねカワラケ破片、第5図版3の轆轤カワラケ小破片が出土している。また本遺構の上面確認作業中に、Ａ１層上面（表土直下）から第7図4の銅製鐚銭1点が出土している。

（2）土坑（第6図）

ＳＫ516土坑

調査区東側に確認された土坑で、南側をSD515堀に切られている。確認部分では南北88cm、東西52cm以上の円形プランと推定され、深さは12cmである。埋土は黒色土ないし黒褐色土主体で自然堆積。Ａ2層に焼土粒が多く混入する。出土遺物はない。

ＳＫ517土坑

調査区南部のSD515堀の南壁を掘り込んで構築された土坑で、長さ2.58ｍ、幅1.18ｍ、深さ26cmの長方形プランである。埋土は人為堆積で、黒褐色土の中に褐色土の塊や粒が多く混入する。出土遺物はない。

（3）柱穴（第5図・第6図）

ＳＤ515堀付近の2口のほか、ＳＤ500堀の壁面に穿たれた23口の柱穴がある。

2　出土遺物（第7図）

縄文土器、石器

図示していないがＳＤ515堀の埋土から単節斜縄文の土器体部の小破片が出土している。縄文時代中期から後期の土器である。また軽石を使用した砥石が出土している。

陶磁器

第7図1はＳＤ500堀とＳＤ515堀から出土した常滑甕の体部破片で、胎土、焼成、特徴から同一個体と考えられる。復元される最大径は47.2cm。粘土紐の輪積み整形で胎土は灰褐色、内外とも表面はにぶい赤褐色の地肌で、外面には暗いオリーブ色ないし濃緑色の灰釉が垂れ下がり、底部近くの内面にも同色の灰釉が落ちている。内面、外面とタタキや当て工具痕は認められないことから12世紀よりも新しく、概ね13世紀から14世紀の製品と考えられる。

第5図版9は肥前染付皿の破片で18世紀から19世紀前半の製品。8は相馬大堀系の湯飲み茶碗で内外に海鼠釉がかけられている。18世紀～19世紀前半の製品である。

土器

第７図２は手捏ねカワラケの底部破片で、内面に油煙の付着が認められる。３は轆轤カワラケの体部破片である。2、３ともに12世紀代の製品である。

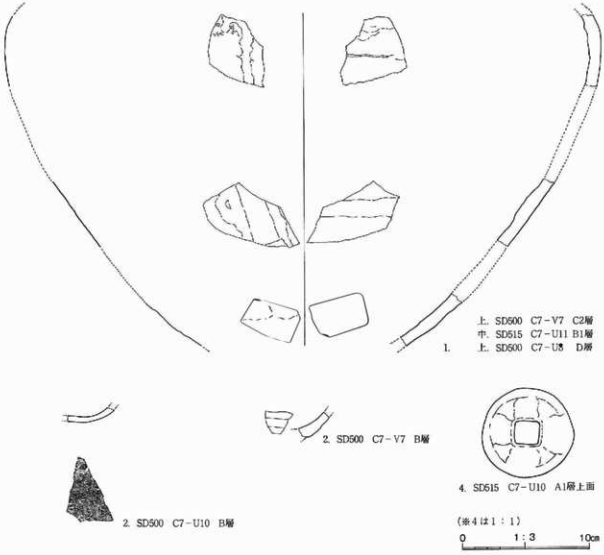
銭貨

第７図４はＳＤ515のＡ層上面（表土直下）から出土した銅製鐚銭である。銭銘は潰れて判読できないが、東北地方の鐚銭の類例から中世後期のものであろう。

柱穴規模一覧表

（※単位はcm、径と深さは最大値）

No.	径	深さ	No.	径	深さ	No.	径	深さ	No.	径	深さ
1	28	24	8	23	16	15	24	12	22	17	13
2	22	24	9	18	10	16	19	27	23	29	19
3	20	16	10	24	8	17	43	33	24	30	10
4	17	19	11	22	16	18	22	21	25	25	26
5	19	18	12	25	16	19	24	32			
6	25	26	13	32	21	20	19	18			
7	19	16	14	22	23	21	16	9			



第７図　出土遺物

Ⅲ　調査の総括

第60次調査では勾当館の曲輪を画する大形のSD500堀とそれに併行するSD515を調査した。またSD515堀に先行するSK516土坑、堀よりも新しいSK517土坑のほか、25口の柱穴を確認している。ここでは併行して確認された2条の堀を中心に調査成果を総括しておきたい。併行する2条の堀は北側の市道とも併行している。SD500堀は推定幅14mに及ぶ大形の箱堀で明治の地籍図や戦後の空中写真でも確認される堀である。堀の外側に存在した道路が堀側に拡幅されたため、堀の外側の壁は道路下となり今回は確認出来なかった。この堀は勾当館のⅠとⅡの曲輪を囲む堀で、新旧2時期の変遷がある。旧期には幅7m、深さ2.9mほどの箱薬研堀であったが、新期には深さ2.2mの幅の広い箱堀に改められている。このSD500堀は自然堆積で埋没しているが、南側のSD515堀は人為的に埋め戻されており、明治の地籍図にも全く表われていない。堀の両側から埋め戻されていることから堀の内外に土塁が存在したと推定できるが、南側からの埋め戻し量が多いことから、内側（南側）の土塁の方が大きかった可能性がある。またSD500堀とSD515堀はある時期併存した可能性が高いが、SD515堀が人為的に埋め戻されていることや地籍図に表われていないことから見ても、SD515堀の方がSD500堀よりも先に埋められていたと考えられる。遺構の変遷は①ＳＤ500堀の旧期の堀とSD515堀の併存から②SD500堀の新期の堀へと変遷し、新期には内側のSD515堀は完全に埋められていたと考えたい。SD500新期の堀南壁の上部には犬走りを中心に23口の柱穴が密集する。垂直に掘られたものと堀側に向けて傾いたもの、浅いものなどが混在しており、堀の壁に乱杭や逆茂木が設けられていたらしい。出土遺物は少ないが、SD515堀のＢ1層とSD500堀のＣ2層、Ｄ5層から同一個体の常滑の甕が出土している。破片の特徴から中世前半の13世紀から14世紀の間のいずれかの時期の製品である。SD515堀からは12世紀のカワラケの小破片も出土しているが、15世紀から16世紀の遺物は出土していない。SD500堀からは常滑甕の他には12世紀のカワラケのほか、Ｂ層から近世後期の陶磁器が出土している。この点からもSD500の新期の堀が江戸時代以後まで堀の形状を残していたことがわかる。少ない遺物量で堀の時期の特定にはいささか躊躇するが、出土陶磁器からSD515堀とSD500堀の旧期については中世前半に遡る可能性があり、SD500新期の堀は中世後半まで機能していた可能性を指摘しておきたい。北側の第58次調査（盛岡市教委2014）では城館の外郭施設と考えられる大溝と掘立柱建物跡、竪穴建物跡に12世紀のカワラケと瓷器系陶器が伴い、勾当館に城館中枢部が推定されていたが、今回の調査ではその明証は得られなかった。これまでの調査結果では遺跡東側の里館については13世紀の陶磁器も少量認められるも、14世紀後半以後とりわけ15世紀から16世紀の遺構遺物が中心である。これに対し遺跡西側の勾当館は13世紀から14世紀の常滑の甕が出土し、15世紀から16世紀の陶磁器はかなり稀薄であり、今回の調査では銭1点のほか、中世後期の陶磁器類は出土しなかった。このことから里館遺跡の勾当館は12世紀の城館の存在はまだ確定できないが、13世紀以後においては里館よりも先行する城館の可能性がある。今後周辺域の発掘調査によって、平泉藤原氏の拠点から栗谷川工藤氏の城館、さらに戦国時代の城館までの変遷がより明確になることを期待したい。里館遺跡は中世の栗谷川を知る上で重要な遺跡であることは疑いない。

註1 『吾妻鏡』文治5年（1189）9月12日の条

2 「陸奥国宣（建武元年9月27日）」（『大日本古文書』家分け「大石寺文書」）吉田東伍1906では本文書を引用して南条氏を福士氏の祖先と推定している。

3 「南部大膳太夫分国之内諸城破却共書上之事」（「聞老遺事」（『南部叢書』第四冊）所収）

引用文献

板橋　　源　1958 「厨川構擬定地盛岡市権現坂発掘概報」（『岩手大学学芸学部年報』第14輯）岩手大学

伊藤　祐清　1749 祐清私記」（『南部叢書』第三冊）南部叢書刊行会1928

伊能　嘉矩　1925 「囑戸考」（『岩手毎日新聞』大正14年1月26日～1月27日）岩手毎日新聞社

小笠原謙吉　1941 「第一章　沿革編」『岩手郡誌』岩手県教育会岩手郡部会

菅野義之助　1925 「厨川構」（『岩手毎日新聞』大正14年1月10日～1月20日）岩手毎日新聞社

菅野　文夫　1999 「幕府政治と動乱」（新しい県史シリーズ3『岩手県の歴史』）山川出版社

鬼中喜多美　1946 「中世期」（『盛岡市史』第二編）盛岡市1978復刻

星川　生南　1833～1874 「盛岡砂子」（『南部叢書』第一冊）南部叢書刊行会1927

吉田　東伍　1906 「陸中国岩手郡」（『大日本地名辞書』第七巻奥羽）冨山房

盛岡市教育委員会　1999 『安倍館遺跡―厨川城跡の調査―』

盛岡市教育委員会　2013 『里館遺跡―供養塔及び駐車場造成に伴う緊急発掘調査報告書―』宗教法人天昌寺、盛岡市教育委員会

盛岡市教育委員会　2014 『里館遺跡第58次発掘調査報告書』工藤善蔵、盛岡市教育委員会

調査区北半（SD500堀）

調査区南半（SD515堀）

SD500 堀（北から）

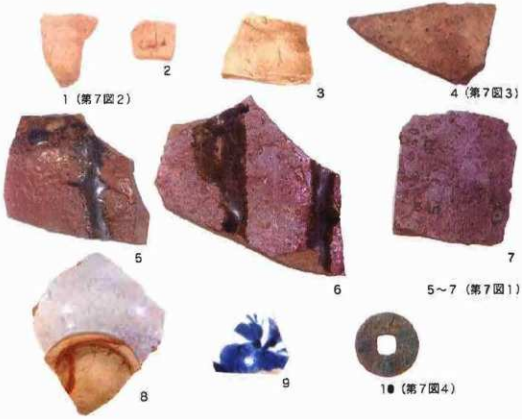
SD500 堀土層断面

SD515 堰（西から）

SD515 堰、SK516 土坑土層断面

SD500 堀の柱穴群

SD515 堀 B1層遺物出土状況


1（第７図２）
2
3
4（第７図３）
5
6
7
5～７（第７図１）
8
9
1●（第７図４）

報告書抄録

ふりがな	さだていせきだいろくじゅうじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	里館遺跡第60次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	室野秀文
編集機関	盛岡市遺跡の学び館
所在地	〒020-0866　岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1　ＴＥＬ 019-635-6600
発行機関	太平工業株式会社　盛岡市教育委員会
発行年月日	2016年12月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 世界測地系	東経 世界測地系	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
里館遺跡（さだていせき）	岩手県盛岡市（いわてけんもりおかし） 北天昌寺町（きたてんしょうじちょう） 17－6・28－20	3201		39° 42′ 40.9″	141° 7′ 4″	2016.07.04 ～ 2016.08.01	105	社屋建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
里館遺跡 （第60次調査）	狩猟	縄文時代		縄文土器破片	
	城館	平安時代末期		手捏・轆轤かわらけ破片	
		中世	堀2条 土坑2基 柱穴25口	常滑甕破片（同一個体） 銅銭（鄭銭）1	
	集落	近世		肥前染付碗破片 相馬大堀系湯呑碗破片	

要約	里館遺跡は雫石川北岸段丘上に位置する中世城館跡を中心とする遺跡である。遺跡西半の勾当館の堀2条を確認し、中世前半の常滑甕などが出土した。これまでの調査成果から遺跡東半の里館地区は中世後半を主体としており、今回の調査結果から遺跡西半の勾当館地区が里館地区よりも先行して存在した可能性を示唆している。

里館遺跡第60次発掘調査報告書

平成28年（2016）12月30日

太平工業株式会社
盛岡市教育委員会

編集　盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866　盛岡市本宮字荒屋13番地1

印刷　株式会社　光文社
〒020-0166　盛岡市東松園3-12-1